

平成27年3月14日

課題 『ゆっくり』

津田 暹 選評

今回は十秀・五客・三才と戴いた。

十秀

腹式の呼吸の極意ゆっくりと 貴香子

ゆっくりと観せてる店も火のくるま 伸子

鈍行の旅も時には良いものだ 岩・和子

大統領ハバネラ踊る仲直り ※ 弘 瑞男

スロースロークイック妻の足を踏む 弘

ゆっくりでいいキューバへ行ける時よ来い 弘純

いつの間に動作ゆっくりして加齢 多美子

ゆっくりと話すヘルパー選ぶ耳 八穂子

高速をゆっくり走るマイペース 多美子

悠久の今日一日を使い切り 南穂子

五客

黒豆を気長に煮上げ家事納め 高・和子

おバカさんゆっくり出来る歳の筈 弘純

残り福待って婚期が逃げて行く 一星

妖怪の孫ゆっくり右へカーブ投げ 瑞男

お銚子をゆっくり振って急かす客 光男

三才

人 ゆっくりとだけど確実減る貯金 あさじ

地 三分の二ゆっくり民の首を絞め 瑞男

天 僕は亀妻は油断のない兎 弘

※【原句】仲直りハバネラ踊る大統領

(公益社団法人) 日本産業退職者協会

築地・海鮮井川柳会

会報九十九号

平成27年2月14日会

自由吟・互選・・・(数字は得点)

- 1 夫からお酒覚えて今感謝
 讚美歌に老いた幸福感が湧く
 温暖化場所弁えず崩れ出す
 極寒にすでに木芽持つ遅しさ
 朝ドラが終わってやつと朝の膳
 沖繩の声天はしがらみほぐせるか
 朝迎え今日の命に感謝する
 理性あり強欲もあって人だもの
 ストーブの焼芋香り友集う
 2 圭・結弦・人気じゃ負けぬ進次郎 ※高・和子
 こりやどうもばったりジャンボくじ売場 弘
 残り世を絞る勇気で渡りゆく 伸子
 不詳事も情が勝たせた二世議員 高・和子
 シャンソンの原語に秘めてひと恋うる 弘純
 ふなっー渡りに船の非公認 光男
 気象用語爆弾も加味超過激 多美子
 3 病院へ行き病人の多さ知る 貴香子
 お年玉硬貨を選ぶ小さな手 八穂子
 独り言言って納得独り者 多美子
 4 青い灯で祝う今年のクリスマス 弘
 5 木枯しがコート裏のオシヤレ見せ あさじ
 6 穏やかにあれ海山川よ未年 瑞男
 9 少しずつ大事にかじる親の脛 あさじ

※【原句】圭・結弦・人気じゃ負けぬ新次郎

◆今月の佳句鑑賞

◎『自由吟』

穏やかにあれ海山川よ未年 瑞男

お流れになった一月句会の作品。年頭吟としてよく出来ていると評価できるが、新年を迎えて今年への心からの思いを綴った独立句としても十分に評価できる。穏やかな羊と、ここ数年荒れ狂っている海山川のイメージが鮮明に対比されて浮かんできて、納得させられる。

◎『ゆっくり』

僕は亀妻は油断のない兔 弘

「僕は亀妻は兔」であったらどうであろう。イソップ物語そのままに、機敏でまありながら油断もする妻と、鈍重でありながら諦めない夫ということになる。この作品の場合は中「が決め手で、妻は油断もしない兔、即ち亀の夫は絶対に勝てないということになり、哀れを感じさせせる。

☆優れた鑑賞文の鑑賞

優れた鑑賞文に触れることによって、句の読解力を強め、結果として作句力・選句力の向上につなげたい。

いやなことあってゆっくり髪洗う 榎原美や路

一句の中に一ついい言葉があればその作品は生きる。という言葉を前に言ったことがある。この作品も、その一ついい言葉によって生きています。ゆっくり、がそれである。この言葉の豊かなひろがりの中に作者の思いが揺曳する。忘れようとしているのかもしれない。或いはもつと何かを噛みしめているのかもしれない。それが何であれ、この、ゆっくり、がかもし出す文学空間は美しい。

*—作品鑑賞集—『対話』石森騎久夫著 より

嘗川柳の群像

(あとがき)

父、大八のこと

古藤愛子

父が高等小学校の頃、パリ帰りの画家が父の絵を見て絶賛し、絵描きになれと勧められて弟子の小出樽重を紹介されたが、貧しさ故に画家になる夢は叶わなかった。その絵の好きな父のそばで育ったせいもあって私も油絵を趣味に持ち、ここ数年は取り憑かれたように父の肖像画ばかり描いている。父を失った心の空虚さも、写真を見つめて描いていると不思議に落ち着く。二十代前半のその写真には、甲種合格をして両腕を組んだ誇らし気な顔をした父が写っている。

父は大陸で哀歓交々の日々を送り、その生活は兵役を加えて約十五年を数えた。当時大陸では、大島濤明、石原青竜刀、宇和川木耳など

の川柳作家が活躍しており、父も【東亜川柳】の創立同人となっていた。また、「月刊満州」「新京日日新聞」の記者として健筆を振るい、多くの著名人を知ることとなる。

至るところではからざる事にぶつかったり思わぬ人に逢ったりしてそのたびに必ず訊くのが「あなたは川柳をどう思いますか」という事である。ある時この事ばかりで肝心の用件を忘れてしまう事があった。これも切っても切れない私と川柳との因縁情誼のせいかもしれない。「川柳雑誌」より。父が書いた「著名人川柳一言録」があり、岸田国士、林芙美子、川端康成、森東魚などが名を連らね、その中でも壇一雄とは特に友情を深めた。こうして川柳を介して幅広い人脈を得ていた。その結果が後の「川柳の群像」の執筆である。昭和十九年現地召集、昭和二十年四月一日迫撃砲の破片で左腕上膊部を貫通されて負傷、隻手となる。終戦後、四国の大洲へ帰った時、老いた母は手のない息子の姿を見た瞬間、絶叫して格子戸をむずとつかみ、涙を滝のようにほとびらかせて号泣した。その夜母と息子は床を並べて寝た。

幸せを母のいびきの横で知り

大八

右腕一本になっても父は生来の明るさで大工仕事も起用にこなし、本箱や椅子を作ったりした。私達姉妹が父は片腕という事をあまり意識せず育ち、そう思わせないように育ててくれた父も偉かった。歯に衣を着せずズバズバとものを言う父だったが、腹藏なくサツパリしたやさしい人であった。長く新聞畑を歩き「岐阜日日新聞」を退社後、業界紙の「陶業時報新聞」を手掛け、「茶わん屋川柳記」などを連載した。また昭和四十九年には東京の帝国ホテルで国宝級の陶芸家七十名

を集めて、「日本陶芸巨匠大展」のプロデュースして大成功をおさめている。

父は野武士のごとくどの柳派にも属さず、我が道を行く一匹狼であった。父没後、書斎を整理すると、膨大な量の随筆や連載物があり、よくこれだけの量を書きまくったものだと思嘆した。今はこれらを「大人」文庫」として残す事が娘の私の役目だと思っている。晩年は闘病生活にありながら、強靱な精神で亡くなる一ヶ月前まで原稿を書き続け、終生現役であった。娘の私が言うのもおこがましいが傑出した人物だったと思う。長年、報道関係に携わった事もあって、才氣溢れた若々しい筆跡は評論・川柳・随筆に生きている。

その父が八十七歳までペン一筋で活躍できたのも、母の無償の愛があつたこそだと思ふ。父の遺書には「八重子には筆舌に尽くし難い恩を受けた」と深謝の気持ちが記されており、二人のあいだに娘として生まれた事を誇りに思い、人として大切なものを教えてもらったと思つている。一枚の色紙に母の描いた墨絵を包み込むように父の句が書き添えられている。

ふつくらと幸せな日が丸くなる 大八

(了)

●お願い 川柳の群像より

川柳関連の発行物は古本・新刊にかかわらず、後世への文化遺産とするために、左記へご寄贈

くださいますよう、お願いします。

日本現代詩歌文学館・電話019 64 3621

〒024・858 岩手県北上市本石町二の五の六十

◇お知らせ

川柳の群像はこれでお仕舞いとします。

今年柳多留は二五〇年を迎え、川柳が文芸として短歌、俳句、に伍する文芸形式を獲得して二五〇年の節目です。(月刊川柳マガジン一月号)次からは「江戸川柳辞典」の中から拾い集め埋め草とします。

例示

日本橋 にほんばし

日本橋絵にかく時は富士をかき

【鑑賞】

日本橋の絵は実際はるかに富士山を描いたものが多く、富士があると日本橋とわかるのである。

【類句】

日本の里数わり出すは橋一ツ

(道路元標は現在も橋の中央にある)

ふる雪の白きを見せぬ日本橋

(人通りが多く、踏み消してしまう)

四日目は乞食で通る日本橋

日本橋かつてに足のむくところ

日本橋どこへゆこうがすきなところ

次回の案内

4月11日課題(寿司)・自由吟 各3句締切3月27日(金)

講師・津田 暹

代表・杉山光男 副代表・家根一星 小菅南穂子

◇平成27年3月14日・会報99号